
MOON-3 『WOLF MEET VAMPIRE』 < 9 >

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 3 『WOLF MEET VAMPIRE』 < 9 >

【Nコード】

N1337M

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

遂に謎の青年 和人との出会いを果たした秀。しかし、和人は彼に『もう一人の自分』を『目覚め』させてはいけない、と言う。

『WOLF MEET VAMPIRE』＜9＞（前書き）

趣味です（―¥）。。。。

深い霧の中だった。

秀は一人、立ち尽くしていた。

自分はこれから何処へ行けばいいのだろう・・・
些細な疑問が脳裏を掠める。

まるで、母親とはぐれてしまった迷い子の心境だった。

オフィスに戻れば、仲間たちがいる。

帰ろう・・・そうは思っても、心の片隅に言葉に出来ない空虚感が残る。

何故だろう・・・今までこんな事一度だつてなかった。

オフィス（あのぼしょ）以外を求めるなんて。

では・・・どうして今までの場所に固執してきた？

仲間たちがいるから？

仲間たちが・・・『人間』だから・・・？

マギレティレバ カラレナイ・・・？

では、自分は『何者』？

何処へ行けばいい？

秀はじつと、自分の右手を見つめた。

誰かが・・・長い間自分が待っていたとも思える、誰かの手が、
差し伸べたこの手を力強く掴んでくれた気がする・・・

『彼』は、何処？

あれは、夢だったのだろうか・・・。

もう一度、秀はゆっくりと前方の白い闇の中へ手を差し伸べた。

ふいに、夢は途絶えた。

眩しすぎるオレンジ色をした光が、眼前に広がる――

「秀・・・？気がついた？」

光が、女性の声で尋ねた。

「・・・さやか。」

秀は心配そうに自分の顔を覗き込んでいる、その眼差しに気づき、
「どうして・・・ここにいるんだ、俺。」

今一つ、記憶が定かでない。

さやかは、ほっとした表情でソファの脇のテーブルからホット・
ミルクを取り、秀に差し出した。

「ここはオフィスよ。安心して。」

「オフィス？・・・青山なのか。」

彼は微かに痛みの残る体をソファの上で起こし、辺りを見回した。
確かに――ここは、スタッフがミーティング・ルームに使って
いる20畳ほどの洋室である。

壁のポスターは、秀が撮影したモデルのものである。

彼は、はつきりしない頭を振り、

「何だつて俺は青山なんかにいるんだか――昨日の夜は、新宿
にいたんだぞ。」

「相当酔つてたみたいね、その様子じゃ。」

さやかは、ホット・ミルクを冷ましながら口に含む秀の姿を見つ
め、呆れた様に言った。

「だから、歌舞伎町なんかでチンピラに喧嘩売ったりなんかする
のよ。お酒を飲んで友好関係を深めるのは構わないけど、今後は相
手を選ぶ事ね。」

「ひどいなあ、さやかちゃん。」

秀は、口を尖らしてそっぽを向いた。「だって、あれは向こうが
悪いんだぜ。セオリー通りの、肩が触れたの、触れないのって――
・・・」

と、呟き、ふいに黙り込む秀。

「乗せられたあなたが悪いんでしょ？一人で帰れないくらい、痛めつけられちゃって・・・秀？」

さやかは、無言の秀に気付いた。「どうしたの？急に黙りこくっちゃって・・・」

「・・・歌舞伎町で？俺が酔っ払ってヤクザと喧嘩した・・・？」
記憶が・・・どこか違う。

それは、自分の『記憶』ではない・・・

秀は、何故かそう思った。

その瞬間・・・あの忌まわしき呪われた人々の姿が目の前を走った。

「さやか！俺をここに連れて来た奴は？」

秀は、胸元の毛布を撥ね退け、立ちあがって言った。「和人は？帰したのか？」

「まさか。せつかく、あなたが見つけたのに・・・応接室に引き留めてあるわ・・・ちよつと、秀っ！」

さやかの言葉を聞き終える間もなく、秀は廊下に飛び出していた。一つ角を曲がり、クライアントを迎える部屋へと飛び込む。

がちや・・・

カーテンが閉じられた薄暗い室内を、静寂が支配していた。

後ろ手で、ドアを静かに閉じる。

秀は、僅かに細めた目を部屋の中央に位置するソファへと向けた。そこには、一人の青年の姿があった。

『来客』にも気付かない様子で、長い睫毛を伏せ、ソファの肘掛に身を任せている。

「・・・・・・・・」

秀は、静かに和人へ近づいて行った。

彫の深い顔立ちと、永遠に眠りから覚めないのでは、とも思える穏やかなその表情。

戸惑いがちに、彼の足下に片膝を付き、眠りを妨げないように――

しかし、このまま目を開けないのでは、という不安に駆られ、彼の頬に右手を当ててみる。

「――・・・」

和人は――ゆつくりと、目を開けた。

秀は何故かほっとして、

「和人――」

彼の名を呼んだ。

和人は、秀の顔を確かめると微笑した。

「傷はもう大丈夫なのか？」

「ちつとも。」

秀は苦笑し、彼の横に腰を降ろした。

「大した事ないさ。理由は解らないが、俺、昔から異様に回復力が強くてさ。」

と、言いながら大きく両腕を天井に向けて伸ばす。「ガキの頃は喧嘩だつて負けたことないんだぜ。」

「そうか。」

和人は安心して言った。「なら、良かった――じゃ、俺、帰るよ。」

「ちよつと――！」

既に秀の横を離れてドアに向かって歩き出した彼を、秀は慌てて引き留めた。

「まだ、話があるんだ。」

「モデルの話？」

和人は、ため息混じりに白いジャケットの肩を竦めた。「朝子から聞いたよ。ずっと俺の事、探してたんだって？新宿中を。」

「朝子・・・？」

秀は首を傾げ、それから思い当った様に、「ああ、あの彼女！朝子さんって言うんだ――お前さんの『運命共同体』。」

「『運命共同体』？」

和人は呆れた様に、「一体何つー表現するんだ、あいつは・・・。」

「モデルの話はもちろんだけど・・・。」

秀は急に真顔に戻り、「昨日のあいつら・・・一体、何者なんだ？」

「・・・。」

和人は微かに沈黙した。

それから、

「どうしてそんな事を聞く？」

彼は秀の質問には答えず、逆に問い返した。「あれは、一夜の悪夢とも思っただけ。その方がお前のためだ・・・。」

「ちよつと、待てよ。」

秀は、彼の前に立ちふさがった。

悲しみと激しい怒りを込めた眼差しを和人に向け、

「俺の『記憶』を入れ替えたのはお前だな・・・！」

「・・・。」

「何で、そんな事した！俺の友人は、昨日のあいつらに殺されたんだ！」

和人はその澄んだ瞳に同様の色を浮かべた。

「じゃ・・・一昨日、俺を尋ねて新宿へ来たのは・・・。」

「・・・本当は、俺が殺されるはずだったんだ・・・。」

悔しげに唇を噛み締めて、俯く秀。

陽光は10cm程開けられた大通りに面したガラスをすり抜けて、カーテンの隙間から2人の姿を暗い室内に浮かび上がらせていた。

沈黙の時が、つかの間続いた。

「・・・すまない。」

光は、和人の碧色の目を細めさせた。「だったら、尚更だ。俺と関わり合いにならない方がいい。どういう訳かは知らないが、もう、俺に近づくな。」

「！……むかつ腹の立つこと、言ってくれるじゃないの。」

秀は乱暴に和人の左肩を掴んだ。「俺の友達は！貴史は！あんたに関わったために、殺されたんだぜ！よくもまあ、いけしゃあしゃあと、傍観者気取ってそんな事言えるねっ！」

「だから、お前にも忠告してるんだ！」

和人は秀の手を払いのけ、彼に負けない程の強い口調で言った。

「これ以上、俺に関わってみろ！お前の友人や、多発している『通り魔』如きの被害者になるんだぞ！」

「こいつ……！脅してるのかよ。」

「脅しじゃない！」

和人の瞳が、秀の瞳を釘付けにする。「昨日の件でお前にも解ってるはずだ。その相手が、到底『人』の力の及ぶべき『存在』ではないことに……」

「……だから、何だってんだよ……！」

秀は、Gパンのポケットに両手をつ込み、仁王立ちで和人に言った。「友達を殺されて……その相手が得体の知れない『化け物』だからって、大人しくしているって言うのかよ……あんたに俺の気持ちかわかるか？」

アイツ ハ・・・タカフミ ハ・・・

オレ ノ イレル ”バシヨ” ノ ヒトリダッタ・・・

それから何も言わず、和人の横をドアへと向かって通り過ぎようとする。

「どうする気だ、秀。」

「お前が何も言わないのならそれでもいい。」

秀は、すれ違いざまに横目で和人を睨む。「俺一人で貴史の敵をとってやる……夜を待って、あいつら全員ぶっ殺してやる！」

「待て、秀！」

部屋を去ろうとする彼を、今度は和人が引き留めた。「やめろ――敵なら俺がとってやる。」

「本当、腹立つね！関わり合いになるなって言ったり、代わりに敵をとってやるだなんて！子供^{ガキ}じゃねえんだぞ、俺は。化け物でも矢でも鉄砲でも持つて来いつてんだ。まとめて秀さんが、片付けてやる。」

「違うんだ、秀！」

銀色のドアノブに勢い良く手をかける、秀。
その手の上に和人の手が重なる。

「俺が心配してるのは、お前の中の――」
そう言った時。

風に煽られた白いカーテンが、大きく揺らめいた。
一気に室内へ流れ込んだ煌めく陽光が、予期せず、和人を直撃する――

「！・・・」

和人は、急に体のバランスを崩し床へ倒れそうになった。
慌てて秀が、その細い体を支える。

「和人！？」

秀は、自分の胸元で固く目を閉じる彼に声をかけた。

「・・・大丈夫。」

和人は、一度、大きく深呼吸をして答えた。

それから静かに目を開き、心配そうに自分の顔を見つめる秀に言った。

先刻の台詞の続きを――

「・・・秀。お前自身気付いているはずだ。自分の中のもう一人の『自分』に。」

「もう一人の『自分』・・・。」

「そう。」

和人は瞳で頷いて秀の呟きを肯定し、「『闇』の”血”を持つ、もう一人の『自分』――それは決して『目覚め』させてはいけな

い。昨夜のように――」

「――」

和人の言葉に反応して、もう一人の『自分』が体の中で再び動き始めたことを、秀ははっきりと感じていた。

『WOLF MEET VAMPIRE』＜9＞（後書き）

趣味でした（―¥）。。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1337m/>

MOON-3 『WOLF MEET VAMPIRE』 < 9 >

2010年10月11日16時38分発行